

伊藤 亜紗 著『ヴァレリー 芸術と身体哲学』
(講談社学術文庫、2021年)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028161

伊藤 亜紗 著『ヴァレリー 芸術と身体の哲学』 (講談社学術文庫、2021年)

安 永 愛

視覚障害者の知覚のありようが、清新かつしなやかな筆致で書き留められた『目の見えない人々は世界をどう見ているのか』(光文社新書 2015年)。視覚障害のトップアスリートの鍛錬に取材した『目の見えないアスリートの身体論』(潮新書、2016年)。ままならない身体の問題としての吃音に注ぐユーモアある明察が印象的な『どもる体』(医学書院 2018年)。様々な障害や病を持つ11人にインタビューを試み、それぞれの「体」との折り(れ)合い方を聴き取った『記憶する体』(春秋社 2019年)。「さわる」と「ふれる」という二つの言葉のニュアンスの微妙な差異に着目することで、子育て、教育、性愛、介助、看取りに至るまで、コミュニケーションの可能性に温かで懐かしくもある光を当てた『手の倫理』(講談選書メチエ 2020年)。大きな反響を呼んだこれらの書物を、近年、立て続けに発表してきたのは、東京工業大学でリベラルアーツ教育を担い、同大学の未来の人類研究センター長をつとめる美学者の伊藤亜紗である。伊藤は、障害や病を背負う人々の「体」の経験を通して語られる言葉について「「最も身近な自然」とつきあう方法をさぐる中から生まれた知恵だ」¹と述べている。障害や病を福祉的な眼差しからではなく、広く人間の感性や生の奥義に通ずるヒントを探るための貴重な例証として捉えるユニークなスタンス、インタビューやフィールドワークの現場を生き生きと再現する曇りなく瑞々しい筆致、絶妙に織り込まれる新たな気づき。そうしたことが、伊藤亜紗の研究の魅力である。『ヴァレリー 芸術と身体哲学』は、活躍著しい伊藤亜紗の研究者としての出発点となった著作である。2010年に東京大学に提出された伊藤亜紗の博士論文を元にした『ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体の解剖』(水声社、2013年)が、このたび講談社学術文庫の一冊として、新たな装いのもとに読者に届けら

¹ 受賞のことば 伊藤亜紗〈第42回サントリー学芸賞 社会・風俗部門〉(2020年12月16日)
https://www.suntory.co.jp/sfnd/webessay/essay/20201216_5.html

れることになった。詳細な注記も備えた掛け値無しの学術論文のスタイルなのだが、刊行後間も無く増刷されるなど、売れ行きも良いという。

長らくポール・ヴァレリー（1871-1945）を研究の軸に置いてきた身として、本書が広く読者に受け入れられていることを、実に喜ばしいことであると感している。それは何より、本書がヴァレリーの思考と感性の最も本質的で根本的な基本線を取り出した書物であるからであり、ヴァレリーを我々の生きる現場へと召喚し接続する書物であるからである。伊藤亜紗という稀有な書き手を得て、今、ヴァレリー・リヴァイヴァルとでもいうものが起こりつつあるのではなからうか。最も普遍的な相において、自然科学にも通じるエレガントさ（無駄のなさ）で巨大なコーパスを持つヴァレリーのメッセージのエッセンスを考え抜こうとする知的・感性的な並々ならぬ熱量の横溢する、決して平易ではない本書を手にとってみようとする読者が次々と現れているのは、『目の見えない人は何を見ているのか』をはじめとする「伊藤本」の愛読者の目に留まったからということに加えて、パンデミックという我々に取って未曾有の（とはいえ人類に取っては繰り返される）状況下、移動を制限されたために、読書や思考が生活の中で平時よりも重きをなしてきているという事情も関連しているのかもしれない。

本書は「作品」「時間」「身体」のシンプルなタイトルの3部から成る。「作品」というものを静的なものとして捉えず、作品自体よりも作品を産みしめた精神にこそ光を当てようとしていたヴァレリー。作品を残すこと自体より、作品を創ることによって己れが創られることに喜びを感じていたヴァレリー。本書は、そうしたヴァレリーの感性と生の流儀を真つ芯に受け止め書かれている。そして、「作品」が受け手（あるいは作り手）の感性を一新していくこと、ヴァレリーの言葉を借りるなら「詩が身体を解剖する」事態に照準しようとする。ヴァレリーにあって、感性を変容させるような力を持った「作品」の中核的モデルは「純粹詩」と名付けられている。過去にも数々の議論を呼んだこのヴァレリーのコンセプトを、伊藤は世紀末の象徴主義から20世紀初頭にかけてのフランスの思潮の中に丁寧に位置付けながら、「純粹詩の概念は、獲得不可能な型の概念、詩人の要望と努力と能力のイデア的な極限の概念」²であるとのヴァレリーの言葉の真意に迫り、「純粹詩」とは、純粹を求める方法論の別名に他ならないことを明かし立てていく。

² 伊藤亜紗『ヴァレリー 芸術と身体哲学』35頁。

ヴァレリーは「伯爵夫人は5時に出かけた」という言葉で、小説や描写文の恣意性とその空虚を皮肉って見せた。ヴァレリーは言葉に、描写とは違う機能を求めようとした。描写しなくとも言葉は機能する。一種の「装置」として身体に作用する。描写はむしろ作品の受け手の身体への直接の作用を迂回せしめるものである。そこに誰よりも敏感であったのがヴァレリーである。伊藤亜紗は、まず本書の冒頭でヴァレリーの言葉がその出所もわからなくなるほど、様々に引用されている事態に触れ、自らの言葉を引用させるヴァレリーの力、その言葉の力の秘密に分け入ろうとする³。本書第1部の、長文詩「若きパーク」の一節を取り上げ、代名詞や動詞がどのように使用されているのか具体的に着目しながら、登場人物（パーク）の身体があたかも読者の身体に明け渡され、読者の身体が動き出す様を描出するかのような伊藤の行文が印象的である。人間行動学者の細馬宏通は、講談社文庫版の解説を「本書は読者に身体を動かすように誘い、読者を「機能」の発見へと誘う。散文の体裁を装ってはいるけれど、実は分厚い「詩」の練習なのである」⁴の言葉で結んでいるが、けだし明察である。

純粹を目指すことを方法として書かれた「作品」が「装置」として「身体」に作用し、「身体」が変容していく。そうした力強い回路を本書は示して見せる。ヴァレリーの残したテキストには、完成した作品のみならず、長年にわたり、最も非社会的な時間である早朝に書き留められたアオリスト的な記録である『カイエ』その他の断章が多々あり、その膨大なコーパスの中からテーマに該当するテキストを的確に拾い上げて行くこと自体、容易なことではない。拾い上げたテキストの断片からヴァレリーの思考と感性の定性的な部分を組み上げるのは、個々のテキストの差異に敏感な「智」と、隔たったものの間の共通性を見出す「慧」の二つ、語の本来の意味での「智慧」無くしてはなし得ないことである。伊藤の著作は、そうした厳しい要件をクリアしている。

生物学者志望から、「身体」を総括的に見る視点が得られるのではないかとの予感に導かれて美学へと「文転」した伊藤にとって、大学3年生の時、佐々木健一のゼミでヴァレリーの『ユーパリノス、あるいは建築家』を精読したのが、ヴァレリー研究のきっかけだという。「一回に数行しか進まないこともある授業で、身が震えるほどきびしく、そして途轍もなく自由だった」⁵と伊藤は述懐し

³ 同書「序—創造後の創造」13-26頁。

⁴ 同書「解説」304頁。

⁵ 同書「おわりに—ひとつの夢を本気で見る」295頁。

ている。伊藤は院生時代、大学の組織とは無縁に、ヴォランティアな媒体として『Review House』という批評誌を立ち上げて編集長を務め、前衛的なアートや演劇、ダンスについて健筆をふるい、アート作品の制作にも関わっていた。そうした活動も続けながら伊藤は、美学研究室の厳格なアカデミズムの鍛錬を受け、二十代を費やしてヴァレリーを読み、その本質を抽出することに賭けていたのだろう。現代的芸術への言及こそ本書では控え目であるものの、伊藤が第三共和制フランスを代表する古典的とも言える著述家⁶ヴァレリーの芸術哲学を「身体」という古今東西に普遍的な土台に基くものとして捉え直し、清新かつ説得力ある誘惑的な読みを展開することができたのは、伊藤の同時代の芸術的实践への生き生きとした眼差し、批評精神があつてこそと、筆者は理解している。

さて、「作品」「時間」「身体」の三部から成る本書の第2部「時間」について、述べておこう。詩が装置として身体に作用するとき、そもそも詩作品は時間芸術として感受されることに加え、作品によって被る身体の変化は、世界との関わりの変化という時間的な要素を否応なく孕む。「時間」の部が「作品」と「身体」の部の間に立てられている所以である。それは、単なる新しさや個性、刺激剤として消費されて終わるといったものではない芸術や詩、美的無限を志向したヴァレリーの思考と感性が要請し、その参照点となるのが、時間の持続に耐えるもの、時間の中で熟成されていくようなもの、あるいは、個人の意図や意識を超えて強い拘束と成形の力を持つ「リズム」といった問題群であったことに深く関わっている。

第3部の「身体」では、補色現象や、刺激と反応の回路といった生理学的枠組みを芸術の享受のモデルとして捉えるヴァレリーの視座、人間の身体を可能性の総体としての「錯綜体」として捉えるヴァレリーの思考法が見事に描出されている。「作品」「身体」の図式はさらに拡大され、身体と世界の出会い、という沃野へと開かれていく。ヴァレリーにとって詩は「私たちの行為の散文的な運行がやぶれるような事態である」⁷と伊藤は「結」で述べている。ヴァレリーは様々な仕掛けや拘束をかけることで、わざと通常の円滑な進行が阻まれるような状態を作りだし、読者が行為の失敗の中から自身の諸機能を新たに組み直

⁶ ヴァレリーは同時代の前衛的な芸術に接する機会を人並み以上に持っていたにもかかわらず、具体的な作品や作者への言及はほとんどなく、総じて言及の対象はバルエボック以前のものに限定されている。

⁷ 同書 265頁。

す必要に迫られることを目論むのである。詩が関わるのは「うまくいかない」という不成功の状態なのである。そのように伊藤は述べている。

「結」にそのような言葉を記したとき、伊藤は障害者へのインタビューを基盤とした研究スタイルを構想していたのだろうか。それは定かではないが、ここに、伊藤の後の研究につながる胚珠を見て取ることは可能であろう。

ヴァレリーの文献学的研究から、障害者とともに行うフィールドワーク的研究へと独自のスタイルで歩を進めている伊藤には敬服する他ない。伊藤の元には、講演やイベントへの出演依頼や原稿依頼が殺到している現状であるが、本書を読了した私は、伊藤にはもう一つの可能性もひらかれているように感じられた。処女作にしてヴァレリーの最も本質的な部分を渾身の力で描き出した伊藤が、成功体験を引きずることなく、思い切って新しい研究分野とスタイルへと移っていったことを清々しいことと見ている。ただ、本書の「おわりに」の伊藤の文書には別の潜在的可能性を認めないわけにはいかない。伊藤は「純粹詩」のコンセプトを掲げ、純粹主義を重んじたヴァレリーを基本的に「垂直型のアーティスト」⁸であると断じている。到達できないユートピアであると知りながら、ある価値を信じ、それに賭けること、夢を本気で夢見ること。伊藤がヴァレリーから受け取ったのはそうしたことであったと書かれている。

2013年着任後、東工大を拠点としている伊藤は、現代社会の多元主義的な傾向や、現代アートにおける水平性、アーティストと観客の民主的な関係性に親和的な活動を多く行っているように見受けられる。人間にはおそらく「根」と「翼」の両方が必要なのだろう。伊藤の近年の研究活動にはもっぱら素晴らしい「根」の広がりを感じるのだが、「翼」の方にもう少し傾くことがあっても良いのではないか、と思うことがある。『Review House』の編集長として先鋭的でもあった彼女の面影を垣間見たことのある者としては、そのような勝手な注文をつけたくなるのである。

ほとんど10人分の仕事を一人でこなしているかのような近年の伊藤亜紗の精力的な仕事ぶりには、単純に楽譜を浄書するだけで10年かかると言われる量の楽曲を残したJ.S.バッハの名がちらついてしまう次第だが、ともあれ、彼女の出発点にしてヴァレリー研究の集大成でもある本書が、ますます多くの読者に届くことを願っている。

⁸ 同書 293頁。